

【提 言】

関西で「未来産業」を育むために

～ウェルビーイング社会をめざして～

平成 24 年（2012 年） 3 月

社団法人 関西経済同友会

未来産業委員会

目次

はじめに	1
第一部 検討の経緯	2
I-1. 1年目に想定した検討プロセス	2
I-2. 未来シナリオを描く前段階	4
I-3. 未来社会シナリオ	5
I-4. 2年目の活動にあたって	9
I-5. 「ウエルビーイング社会」に向けたパラダイムシフト	10
I-6. 「ウエルビーイング社会」	12
I-7. 「土壌」の整備・産業集積の条件	12
第二部 提言	14
II-1. 関西における未来産業創成に向けた提言	14
II-2. 「ウエルビーイング社会」の実現を関西は目指そう。	15
II-3. 「未来にむけて土壌を整備する」ために我々が自ら取り組もう。	16
II-4. 「未来に花開かせる産業」として5つの領域に力を入れよう。	20
おわりに	26

はじめに

「未来産業」とは、今はまだその姿を現していない産業の抽象的な総称である。ここでの「未来」は、現在の延長からは予測しえない近くとも 10 年先から、遠くとも夢物語とはならない一世代・30 年先まで幅を持たせることとした。

本委員会では、関西の強みを再発掘して深化させ、それら強みの有機的な連携を基軸として未来を見据え、関西地域の産業が持続的に成長し、新産業が花開くための要件を「未来産業とその発展モデル」として研究することをテーマとして掲げ、2 年間の活動を行った。

1 年目である昨年度には、まずは実現性のある未来予想図を模索することとし、シナリオを描いた。東日本大震災、タイの洪水、超円高、ユーロ圏での問題発生など、さまざまな社会での大きな変化があり、それらも考え合わせた上で、シナリオで描いた未来像に至るための打ち手を探るべく、2 年目の議論を行った。

本委員会の提示した未来への行動が、実際の未来産業の創出と、関西の活性化に資することができれば幸甚である。

第1部 検討の経緯

I-1.1 年目に想定した検討プロセス

未来産業を考えるにあたり、1年目に設定した取り組みの全体像とそのプロセスは、以下のようのものであった。即ち、検討シナリオを7つのフェーズに分けて考えることとした。

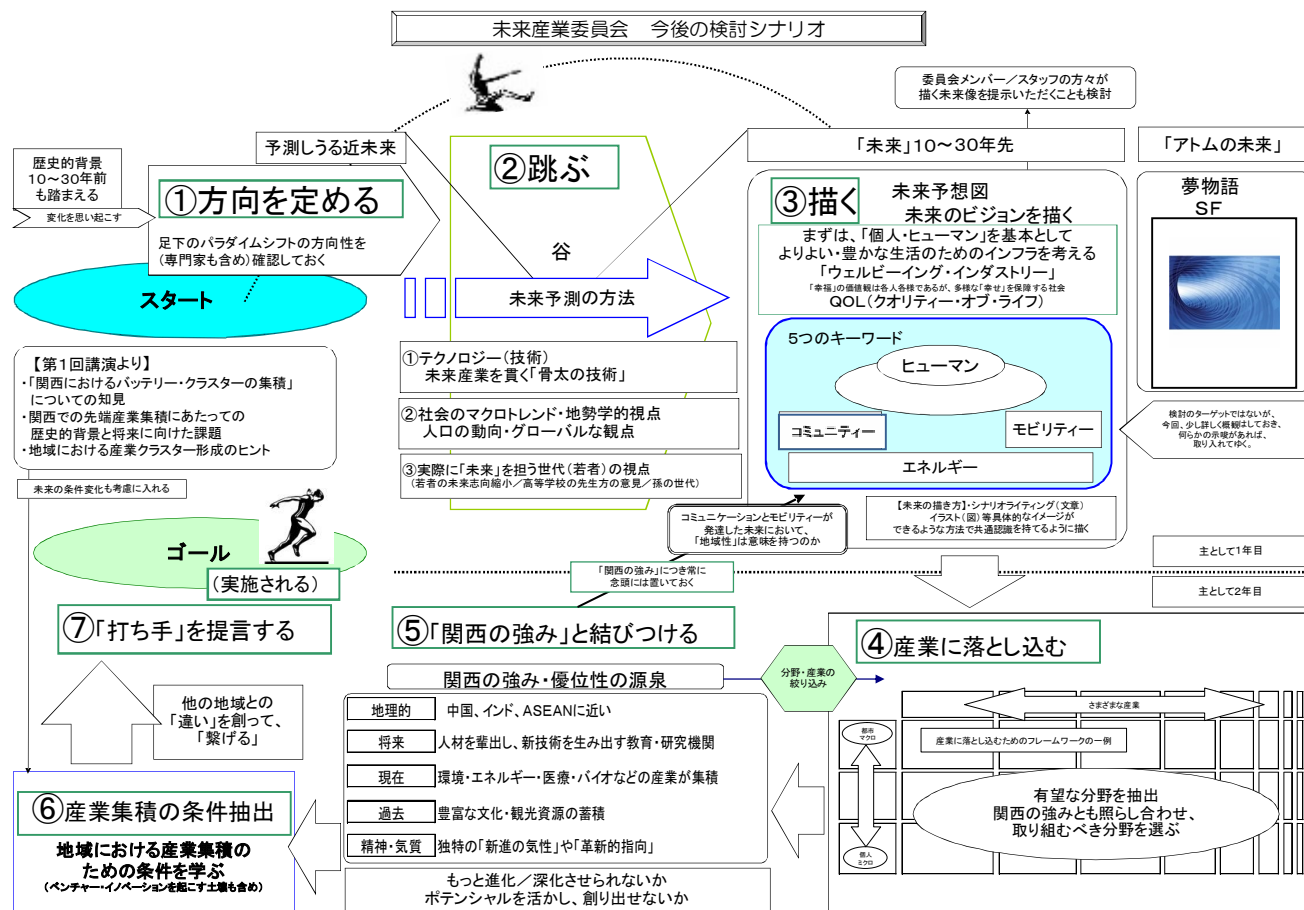


図1 検討プロセス

第1フェーズは、「方向を定める」として、未来を俯瞰するに際し、その方向性を定めることからスタートする。まずは予測しうる近未来も含め、足下で起こっているパラダイムシフトについて専門家の意見も踏まえて認識を共有することとした。また、ここでは、歴史的背景を踏まえるために、時間軸を逆に遡って10~30年前を振り返り、現在までの変化を見ることで、今後の変化を見ていくにあたっての参考とした。

第2フェーズを、「跳ぶ」とした。未来予測を行うわけであるが、ここでの合意としては、まずは産業の核となるテクノロジーを一つの軸とすること、中でも未来産業を貫く「骨太の技術」について押さえていくこととすることであった。また、人口動態など、一世代先であっても比較的予測がしやすい社会のマクロトレンド、地政学の観点をもう一つの軸とした。

さらに、実際に未来を担う若者が大事であるとの認識から、彼ら／彼女らの意識面についてフォローも行うこととした。未来を予測する手法についてはさまざまなものがあるが、それらの検討を行った上で、「シナリオプランニング」の手法を用いることとした。

第3フェーズは、いよいよ未来の社会を「描く」段階である。ここで、「未来」については、一世代先として、10年から30年まで幅を持たせた概念と定義している。ただし、「未来」という場合、その言葉からどうしても夢物語、SF的なことが想起されてしまう傾向がある。そこで、いわば手塚治虫氏の「鉄腕アトム」の世界における未来社会像をはじめ、さまざまな夢物語については考える上でのヒントとはしつつも、提言において描かれる未来像は「アトムの世界」とは違うということを念のために押さえた上で、「描く」こととした。

「描く」にあたっては、漫然とさまざまな要素を並べ立てる方式ではなく、5つのキーワードによって捉えることとした。ここでは、社会インフラとして「モビリティ」「コミュニケーション」「エネルギー」という3つの分野、さらに、それらの土台の上に、人々が暮らす「コミュニティ」、そして、その中心となる「ヒューマン」という5つのキーワードを抽出した。委員会では、未来を考える上で中心として考えていくべきはやはり人であり、よりよい・豊かな生活を実現していく「ウェルビーイング」という概念を、未来を描く上での主眼として考えるべきとし、これをメインコンセプトとして描いていくこととした。

この、「シナリオを描く」ところまでが一年目の活動であり、二年目の活動予定は当初以下のようなものを想定していた。

第4フェーズ「産業に落とし込む」ところから二年目の活動は始まる。一年目に描いた未来像について、そのような社会が実現した場合に、社会ニーズがどのように変遷するのか、人々の意識はどのようなになっているのか、それらを踏まえると、どのような産業が出現するのか、ということから、将来に必要とされる産業の姿、すなわち「未来産業」について考えを展開する。そして、それらの中から有望な分野を抽出し、次のフェーズでの「関西の強み」と照らし合わせて、取り組む分野を絞り込んでいくというプロセスを辿る。

第5フェーズは、それら有望分野を「関西の強みと結びつける」という段階とした。これまで、幾多の関西発の提言がそうしてきたように、「関西の強み」というところからスタートしてしまうと、既存のものの組み合わせ、あるいは延長線上での思考となってしまう、本当に関西に必要な要素が実は外部にあって、それらを取り入れていかなければならない場合にあって、それらが検討の対象から漏れてしまうという懸念がある。そのため、関西の強みは当然ながら念頭にはおくものの、あえて「関西」という縛りを外した形で、先に未来産業を検討することとしたものである。

第6フェーズは、「産業集積の条件抽出」である。関西という地域で、第5フェーズまでに

選んだ「未来産業」を振興していくにあたり、「地域における産業集積」の条件を、未来の技術・社会という条件の変化を踏まえた上で検討していくとしたものである。

第7フェーズは、これらを踏まえた上での提言となる。

全体の設計図をこのように規定し、一年目は、第3フェーズの未来シナリオを描くところまでを進めた。ただし、第4、第5フェーズで「関西」という縛りを外して未来産業を選定するとしたものの、関西を意識しておく必要はあるため、一年目においても、大阪万博以降、関西が相対的にみれば東京・名古屋に比して力を落としてきた要因につき検討を行っている。

1年目の講演会については、第一回として、未来にむけて、関西における産業集積の好事例であるバッテリー産業の集積を中心に、日本政策投資銀行関西支店・企画調査課の坂田枝実子氏により「関西におけるバッテリー・クラスターの集積」と題しての講演をいただいた。また、パラダイムシフトの最たるものである「低炭素・循環型社会への移行」そして「持続可能性（サステナビリティ）」という観点から、第2回講演会において、京都大学大学院経済学研究科の植田和弘教授に「未来産業と環境経済戦略」と題してお話をいただいた。

これらの活動の結果、一年目としては、80ページからなる「未来産業を育む『未来社会のシナリオ』」と題した中間報告書を取りまとめた。

ここでは、中間報告で示したシナリオの枠組みを簡単に紹介しておく。

I-2. 未来シナリオを描く前段階

第1フェーズ：方向を定める

未来を見据えるにあたり、それぞれが将来にわたって続いていくものなのか、揺り戻しが来るものなのか、さらに加速して次世代には次のステージに行くものなのか、といったことを見極めなければならないが、足下のパラダイムシフトとして以下の8つをあげた。

- (1) グローバル化の進行（先進国の地位低下と新興国の勃興）
- (2) 低炭素・循環型社会への移行・サステイナブル（持続可能性）
- (3) 安心安全・長寿・少子高齢化社会への移行
- (4) ICTの発達・情報大爆発
- (5) 都市化の進行
- (6) エネルギー資源の確保
- (7) 食料需要の増大と食糧安全リスクの高まり
- (8) 世界規模で勃発する民主化の波

第2フェーズ：跳ぶ

未来予測の方法として、(1) PEST分析、(2) デルファイ法、(3) バックキャストイング法、(4) シナリオ・プランニング法などを検討したが、未来の姿を描くにあたっては、シナリオ・プランニングの手法を取り入れ、描写とストーリーを加えることとした。また、最初に産業・技術ありきではなく、「人間がいかにウェル・ビーイングな存在として生活するか」を描くことから始め、次にそれを産業に落とし込むものとした。さらに「技術」と「社会」の2軸を中心に、未来産業を貫く「骨太の技術」と人口など地政学的視点から描くことを目指すこと、が方針として決められた。

また、一言で「未来」といわれるが、我々がターゲットとしている「10～30年後」の未来、すなわち子・孫の世代が現実に直面する未来と、50～100年後といった、いわば「夢物語」「SF」として描かれる未来は区別されなければならない。そこで、「夢物語」の未来を、「アトムの未来」と名付け、「想像はできるが、我々の想定は越えている」、という確認を先にしておくことで、時間軸を明確にしておくこととした。すなわち、「アトムの未来」を見すえ、SF小説や映画の中に見る30年後以降の未来社会について、シナリオのキーワードである、(1) エネルギー、(2) コミュニケーション、(3) モビリティ、(4) コミュニティ、(5) ヒューマン、に加え、人間の活動の場を拡げるフロンティア(宇宙・海底等)、ロボット・ヒューマノイド・人工知能、食料、夢のコントロール、などにつき映画や本からピックアップしたものをシナリオの前段として記載した。

I-3. 未来社会シナリオ

第3フェーズ：描く [未来社会シナリオ]

シナリオを描くに際し、一つの軸として、マズローの「欲求5段階説」を念頭においた。これは、人間の基本的欲求を低次から、(1) 生理的欲求 (physiological need)、(2) 安全の欲求 (safety need)、(3) 所属と愛の欲求 (social need/love and belonging)、(4) 承認の欲求 (esteem)、(5) 自己実現の欲求 (self-actualization) の5段階に分類したものであり、生理的欲求・安全の欲求までを社会インフラ、所属と愛・承認・自己実現については、個人の幸福との位置づけで捉えたものである。

シナリオは、約30年後に生きる40代と思われる男性の一人称にて記述されている。

シナリオ構成のイメージ図を以下に示す。

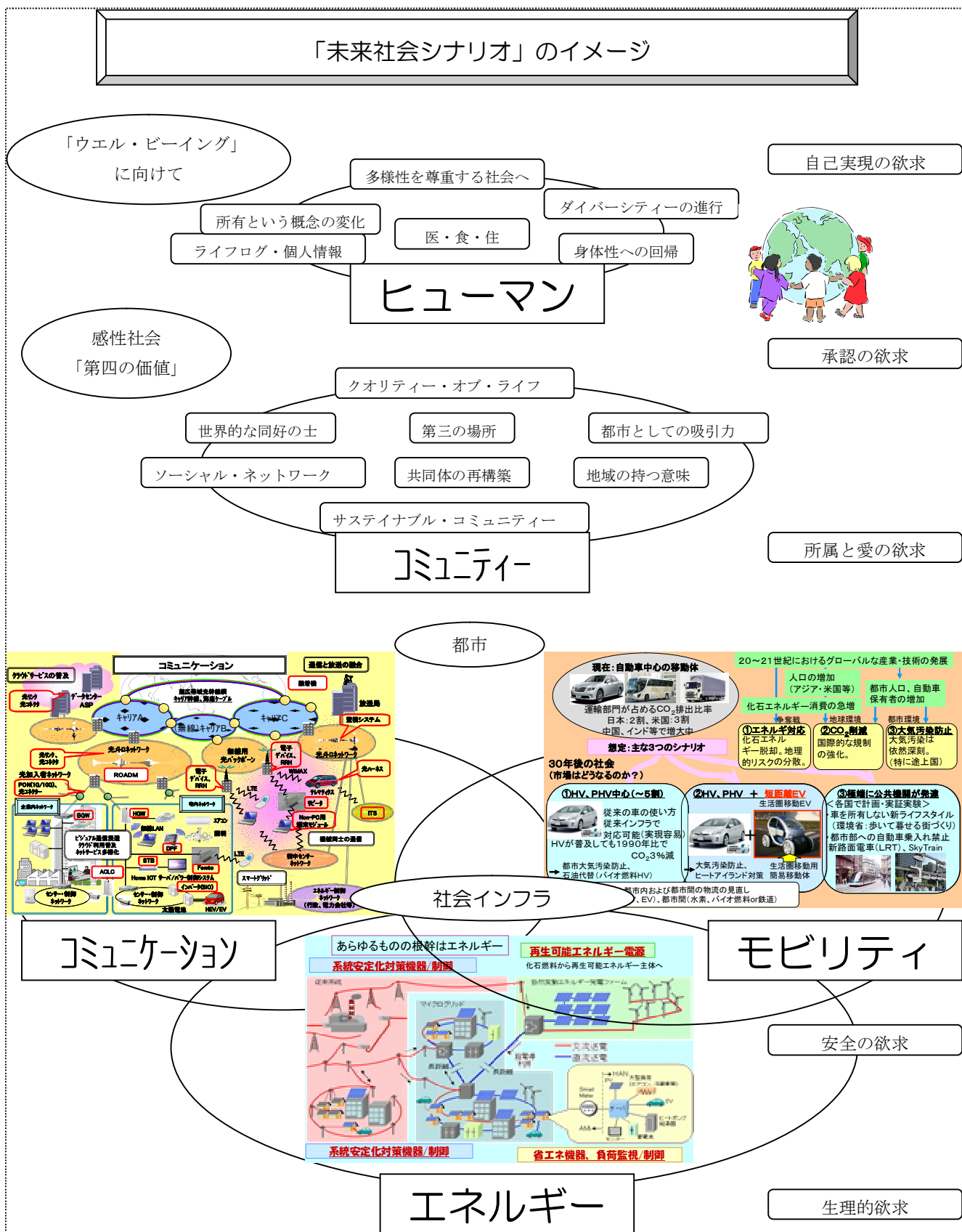


図2 未来社会シナリオのイメージ

(1) まずは、持続的な社会・豊かな生活のための社会インフラ ～エネルギー、コミュニケーション、モビリティ～

社会生活を送るにあたって、基本となるのは、生理的欲求や安全の欲求が満たされることであり、また、社会的なインフラが整っていることである。20 世紀までは、資源というのは無限に利用可能であると考えられていた節がある。しかし、その環境にも「地球」という惑星内に限定すれば制約があることが認識されるようになってきた。地球という大きな生活の舞台の、持続可能性・サステナビリティということは現代の人類の共通認識といってもよいであろう。すなわち、有限な資源を最大限に活かして、快適な生活を送るための社会基盤を整えていくということが、よりよい暮らしをしていく上での基盤になっている社会が未来社会であろう。シナリオでは、社会のインフラとしてのエネルギー、コミュニケーション、モビリティという3つの観点から未来の姿を描いている。

(2) 次に、ヒューマン（個人）の幸福を目指して ～コミュニティ、ヒューマン～

社会インフラが整うということは、マズローの欲求5段階説でいえば、最初の二段階、すなわち「生理的欲求」と「安全の欲求」が満たされることを意味する。では、「所属と愛の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」はどうか。これらは、インフラ、物的な所有による充実、さらには「効率」や「便利さ」という観点のみではあらかた含んでくる。

そのためには、4つ目のキーワードとして、まずは所属する「コミュニティ」とその機能を有する「都市」という概念を考えていくこととした。そして、それに続き、ひとりひとりの人間・生活者という観点から「ヒューマン」を5つめのキーワードとして掲げた。

生活の中で、幸福を求めるとなると、社会の中での「承認」さらには、「自己の実現」といったことによる、「ウェルビーイング」な生活を追求していくことになる。「ウェルビーイング」とは、直訳すると「幸福」であり、語源は1946年におけるWHOでの草案がもとになった言葉である。

また、「ウェルビーイング」と共に、これらを考えていく上でのキーワードは、「クオリティ・オブ・ライフ」であろう。クオリティ・オブ・ライフ（Quality of Life,略語：QOL）とは、一般に人や社会の生活の質、つまり、ある人がどれだけ人間らしい生活を送り、「幸福」を見出しているかを尺度としてとらえる概念であるとされる。「幸福」とは財産や仕事だけではなく、住宅環境、身心の健康、教育、レクリエーション活動、レジャーなど様々な観点から計られる。（したがって個人の収入を基に算出される生活水準（standard of living）とは分けて考えられるべきである。）また国家の発展、個人の人権・自由、居住の快適さとの関連性も指摘されている。

シナリオでは、まず、コミュニティーという機能をリアルに・物理的に包含する「都市」について考え、また、物理的な場所・距離の意味が薄れる中で「地域」が持つ意味を問い直している。ICT技術の発展により、「距離」はある意味で関係がなくなり、仕事面などでの人の居住性に関しては「分散化」が可能となったはずであるが、一方で、エネルギーという観点から効率を考えると、人は集まって暮らしていかなければならず、「都市」への物理的な集積が見られることになる。都市の数が増えることも一つの理由ではあるが、国連人間移住計画によれば、2050年には世界人口の約7割が都市部で生活することになるとされる。

都市に関しては、産業振興のために最も必要な要素は、優遇税制でもインフラでもなく人材であり、地域の産業振興で大事なものは、「域外の人材」が住み着くかどうかということが述べられている。関西で考えると、やはりアジアの優秀な人材が来て、働いて、一定期間であっても住み着いてくれることが大事である。そのためにも、都市は、地域は、吸引力を持たなければならない、都市としての魅力が、それらの人たちを惹きつけ、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションが持たれる「場」がその都市に設定されることが重要とし、その場合、都市は旗幟を鮮明にする必要があるとしている。何でも一通りを取り揃えている平均的な都市では魅力はない。集まる場所とするためには、地域としての魅力をアピールし、むしろある方向に特化するような、特徴のあるものを打ち出していかなければ、あるいは、他とは違うポジションをあえて取らなければ、地域としての魅力はなくなり、人が惹きつけられないのではないかとシナリオでは描いている。

また、ネットワーク上に存在する「コミュニティー」について考察し、さらに、共同体の再構築という観点や、価値観の多様化の中で、家庭・職場とは別の場所である「第三の場所」の存在意義の増加について見ている。コミュニティーが成立し、所属の欲求が満たされ、それらコミュニティーの中において、承認の欲求が満たされた先は、やはりマズローが言う第5段階である「ヒューマン」における自己実現であろうとしている。

「ヒューマン」という要素を考えた場合、シナリオでは、基本・ベースとしての、「医・食・住」（通常の「衣」を「医」に変えたもの）を取り上げ、それら基礎があった上で、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）あるいは、幸福・ウェルビーイングの追求があるとし、未来において「モノの豊富さから、健康・安心・安全の重視へ」という中で、テクノロジーの進化によって、誰もが質の高い生活を享受できるようになっていく中で、より精神的な充足感を人々は求めるようになっていくことが描かれる。

そのような中で、シナリオは、医療、食糧と水、住宅、個人情報集積・ライフログ・コンシェルジュ、身体性への回帰、所有という概念の変化、ダイバーシティの進行、多様性の尊重、高齢者が活躍している社会、教育について述べ、産業に関係する事柄として、観光、安心安全、自然災害・課題先進国日本、娯楽、素材、ロボット、感性社会、などについても触れている。

I—4. 2年目の活動にあたって

当初、委員会ではこの1年目に描いた中間報告のシナリオをもとに、第4、第5、第6フェーズと順に検討を進めていくはずであった。すなわち、シナリオから有望な未来産業をいくつか選定し、関西の強みと結びつけた上で絞り込みを行って、それらの産業集積に必要な条件を整えるためにどうすべきか、という形で提言を行う予定であった。しかしながら、2年目に入って議論を進める中で、この方針は変更されることになる。

1年目の最終回の委員会は、奇しくも2011年3月11日の午前中に行われている。委員会の終了直後にあの震災が起こった。おそらくそのことも、影響がないわけではないであろう。2年目の第一回の講演は、博報堂生活総合研究所の嶋本達嗣所長にお願いし、「Life After 3.11と生活者の視点から見た未来産業」のタイトルで講演をしていただいた。

1年目、我々は社会・産業といったマクロの変化軸でもって未来を捉えることで「未来産業」が抽出できるはずである、という想定を行っていた。しかしながら、震災を受けることで生活や考え方に変化が起こり、また、未来社会シナリオを描く課程で人・くらしという観点の重要性を再認識したことなどから、産業をマクロの観点のみで考えるのではなく、生活者のミクロの観点も交えるべきであるとした。従って、両者の視点から目指すべき社会像を描き、そのコンセプトをもとに、その社会像を実現するビジネスはどうあるべきか、を考えていこうということになった。議論の中で浮かび上がってきたキーワードが、「ウェルビーイング社会」である。

そのため、中間報告での産業・社会面における8つのパラダイムシフトに加え、生活面におけるパラダイムシフトもあわせて、20～30年後に目指すべき・出現するであろう社会の姿を「ウェルビーイング社会」として検討した。ニーズのあるところに生まれるのがビジネスあるいは産業であることから、その社会ニーズに応えるものこそが「未来産業」である、という認識のもと、さらに検討を進めた。検討にあたっては、単に甘美な未来像を描くだけではなく、競争優位性を持ち、勝ち抜ける産業でなければならないという視点も強調された。

すなわち、未来の姿として「ウェルビーイング社会」をめざし、その「ウェルビーイング社会」に対応したニーズの産業化により花を咲かせる未来産業の抽出と、その土壌として関西の「ウェルビーイング社会」化の両面によってこそ、「関西の土壌で花咲く未来産業」というモデルを提言できる、という観点に立って検討を進めることとなったのである。

その方針に基づき、2年目の第2回講演は、「地域における産業集積の条件～関西で未来産業が花開く土壌を育むために～」とのタイトルで、日本政策投資銀行 産業調査部 チーフエコノミストの鍋山徹氏にお話をいただくこととなった。

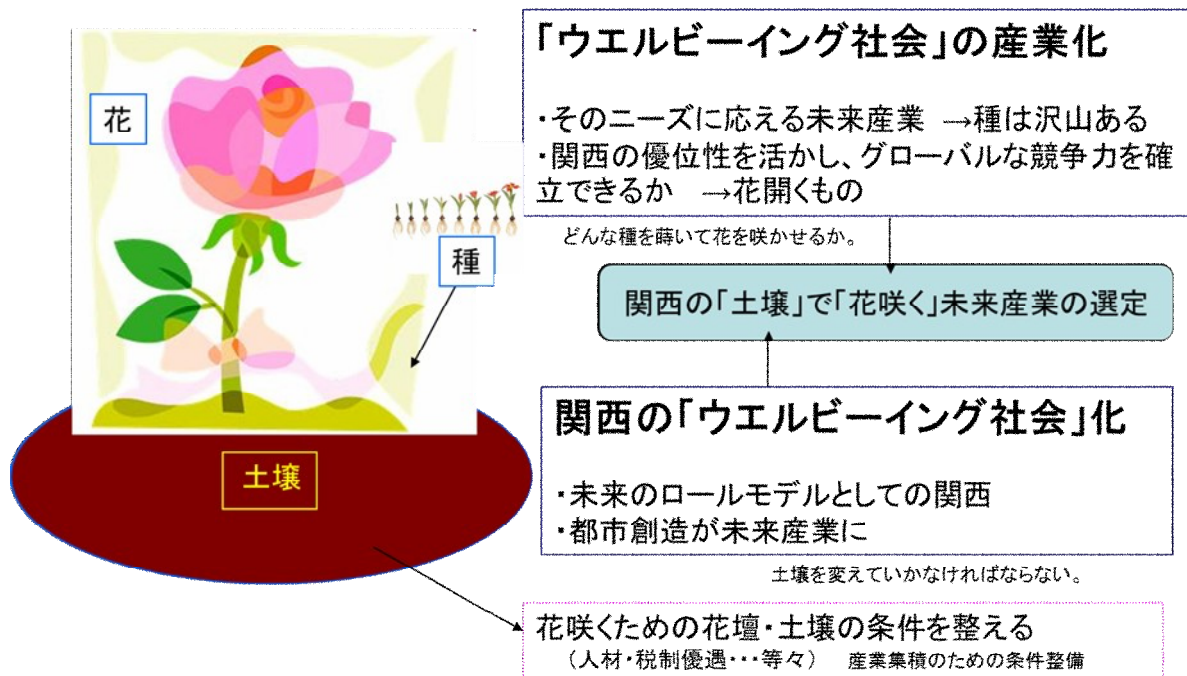


図3 関西の土壌で花咲く未来産業の選定に向けて

I—5. 「ウェルビーイング社会」に向けたパラダイムシフト

1年目に、産業・社会面におけるパラダイムシフトとして、(1) グローバル化の進行（先進国の地位低下と新興国の勃興）、(2) 低炭素・循環型社会への移行・サステイナブル（持続可能性）、(3) 安心安全・長寿・少子高齢化社会への移行、(4) ICTの発達・情報大爆発、(5) 都市化の進行、(6) エネルギー資源の確保、(7) 食料需要の増大と食糧安全リスクの高まり、(8) 世界規模で勃発する民主化の波、の8つを抽出したわけであるが、加えて2年目には、生活面におけるパラダイムシフトとして、以下のような検討を行った。

世界は、もはや米国を先行モデルとする発展プランは描けず、大量生産・大量消費モデルの終焉を迎えており、米欧日は、需要不足・カネ余り・デフレ、新興国は、潜在需要はあるが、供給制約で成長に限界というような中で、大きく以下のような新たなパラダイムへの変換がなされている（図4参照）。また、それらを産業に関連づける試みとして図5のような検討がなされた。

生活面におけるパラダイムシフト		
量	から	質
均一・統一的	から	多様・多元的
集中	から	分散
大きい	から	小さい
効率	から	余裕

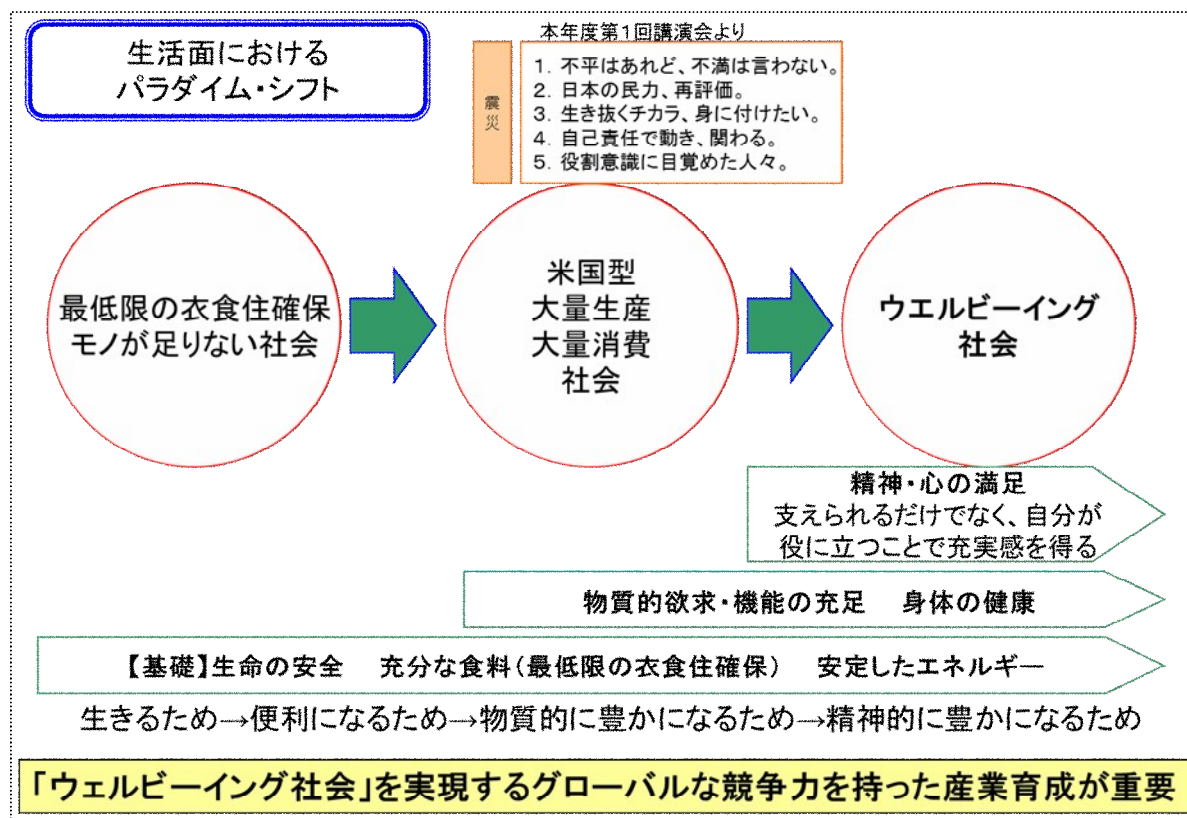


図4 生活面におけるパラダイムシフト

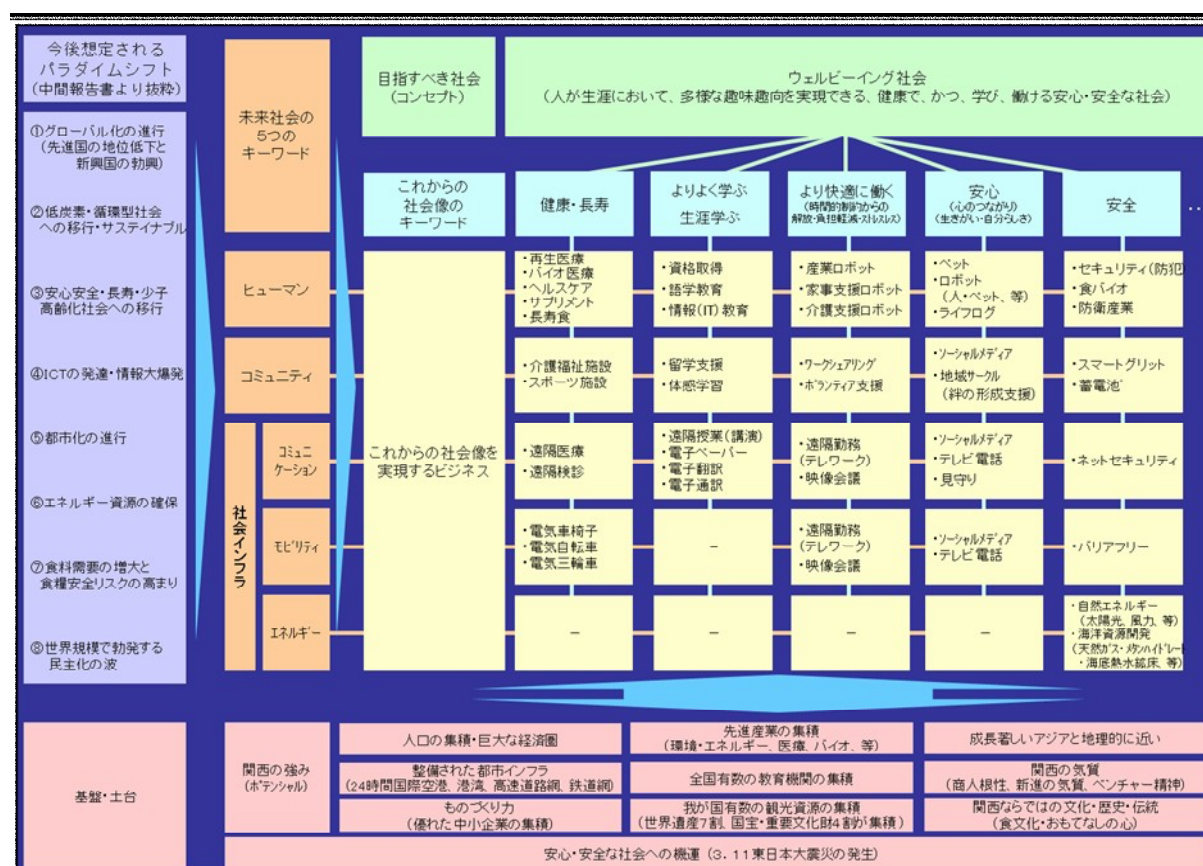


図5：ウェルビーイング社会とパラダイムシフト・関西の強みとの相関における未来産業

I－6. 「ウエルビーイング社会」

多くのディスカッションを経て、さまざまな「ウエルビーイング社会」のイメージが提示・検討されたが、第2部の提言部分では、そのような議論を重ねた中から浮かび上がった目指すべき「ウエルビーイング社会」の要件を記している。

また、関西を未来の「ウエルビーイング社会」のロールモデルエリアとし、その都市創造が未来産業につながるものであるべきであり、その社会自体の魅力によって人を引き寄せることができる、という観点からは、「ウエルビーイング社会」をめざすことが実は産業集積とも不可分であることが明らかになってきた。

その観点から、関西という地域が目指すべき都市のキーワードとして、「憧れの対象となる都市」があげられるであろう。これは、時代の先端を映す都市となるべきというものであり、例えて言えば、アテネ→ローマ→ベネチア→ウィーン→ロンドン→ニューヨーク、と続いてきた「世界中から憧れられる」都市の次の位置を、関西が目指すというものである。

I－7. 「土壌」の整備・産業集積の条件

前述してきたように、2年目は、単に将来有望な産業群を選び、関西でそれらを重点とすべし、との提言では不十分であり、その土壌もあわせて変えていかなければならないとの方向性により議論を進めてきた。

2年目の第2回講演会では、(株)日本政策投資銀行・産業調査部・チーフエコノミストの鍋山徹氏に『地域における産業集積の条件～関西で未来産業が花開く土壌を育むために～』をテーマとして講演をいただき、その中で、日本の強みと弱みの認識、ヒト・モノ・カネ・情報・風土といった地域資源の活用方策、さらには地域戦略につき、豊富な引用をもとにご説明頂くと共に、産業集積の事例として最も著名な「シリコンバレー」のみならず、デンマーク・コペンハーゲンとスウェーデン・スコーネを結ぶオーレスン地域にバイオ・医療・IT・食品の産業クラスターを形成する「メディコンバレー」、オウル大学やノキア本社等を中心に発展を遂げたフィンランドの「オウル市」などについても説明を受けた。

また、地域資源としては、1. ヒト、2. モノ、3. カネ、4. 情報、5. 風土、という5つの視点を提示いただき、地域戦略としては、「他地域が立ち回れない分野を重点とする」べきであり、地域の強みを引き出すには、「東京などの競合都市と同じ点ではなく、違う点を探すべきこと」や、「予定調和の逆を行くこと。個人の思い入れのほうが合議制よりもはるかに可能性がある」ことなどをご教示いただいた。

また、シリコンバレーの特徴として、文献より、①起業に適したルール、②知識の集積（専門性）、③高品質で流動性のある労働力、④結果重視の実力主義、⑤リスクをとることを賞讃し、失敗を許容する風土、⑥外部に開かれた事業環境、⑦起業（産業）と活発に交流する大学と研究機関、⑧企業、政府、NPOなど多様な組織の協力、⑨コミュニティーを通じた快適な生活、⑩きめ細かなビジネス・インフラ、があげられることをご紹介いただいた。そのような環境の下で、研究とビジネスの融合が行われたのであろう。

出典：“The Silicon Valley Edge” Stanford University Press, 2000（翻訳：シリコンバレーなぜ変わり続けるのか（上・下）日本経済新聞社）

これら2年目の議論、すなわち、産業単体として未来産業を捉えるのではなく、「ウェルビーイング社会」というあるべき未来像の中から、産業とそれを育む土壌である地域を不可分として考えるべきことなども踏まえ、以下の提言を行うこととした。

第2部 提言

Ⅱ―1. 関西における未来産業創成に向けた提言

委員会等による提言は、得てして「べき論」を述べて、「お願い」ベースで行われることが多い。しかしながら、条件が整うのを待っているという姿勢では、いつまでたってもその条件は整わないものであるし、整ったとしても、必ずしも当初の思惑通りに進むものではない。

政府に、自治体に、こうしてほしい、と単にお願いするのではなく、我々が、個々の経済人として、何を目指し、何をやっていけるのか、という観点から以下を提言することとした。まずは、自分たちで「思い入れ」を持ち、具体的に動くところから、ものごとは始まる。

最初は、「ウェルビーイング社会」を未来に関西が目指すべき姿・ビジョンとして掲げようということである。「ウェルビーイング社会」の共通認識としては、単に健康産業を目指すのではなく、総合的な人間のウェルネスを考え、社会インフラをはじめとする基盤の上に、良質なコミュニティを築き、あくまで人としての幸福を追求してクオリティ・オブ・ライフを求めるものである。次世代を迎えた関西のあるべき姿の象徴的なコンセプトとして「ウェルビーイング社会」を目指そうということであり、関西を、その望ましい姿にしていこうとこそが、遠回りには見えるけれども、ひいては未来の産業を育成することにもつながり、それら産業を担う人材が集まる、というのが我々の共通見解である。

2つめとして、その「ウェルビーイング社会」を実現していくために、我々は何ができるのかを示すこととした。それは、とりもなおさず、未来産業が花開く土壌を育むことに繋がるものである。これは、条件を整えるべき、という人任せのお願いではなく、関西にいる経済人である我々が、自分自身で具体的に今後取っていくべき行動を示そうとしたものである。

3つめに、具体的な「未来産業」の候補を掲げ、関西としてこれらに注力していくべきというものを示した。「ウェルビーイング社会」を目指す中で何かが創出されるはず、という抽象論にとどめず、現在有望視されている分野も当然含めながら、関西としての強みも出していけるであろう産業を5つ抽出したものである。経済人として、これらの産業を、意識して関西の地で重点的に創成・育成をしていこうではないか、という我々の意思表示でもある。

関西で未来産業を育むにあたり、

- (1) 「ウェルビーイング社会」の実現に関西は目指そう。
- (2) 「未来にむけて土壌を整備する」ために我々が自ら取り組もう。
- (3) 「未来に花開かせる産業」として5つの領域に力を入れよう。

Ⅱ－２．「ウエルビーイング社会」の実現に関西は目指そう。

「ウエルビーイング社会」は、総合的な人間のウェルネスを考え、社会インフラをはじめとする基盤の上に、良質なコミュニティを築き、あくまで人としての幸福を追求してクオリティ・オブ・ライフを求めるものである。「個人の多様な趣味趣向を実現できる、健康で、かつ、学び、働ける社会」「安心・安全が確保され、自己実現可能性を補助する、多様性が認められた社会」など、さまざまな理想像の提示を、以下のような要件として取り纏めた。

- (１) 安心・安全が確保されている社会
～安全で安定した生活基盤がベース～
- (２) 低炭素・循環型社会
～情報は豊かに、モノとエネルギーはつつましく～
- (３) 安定した社会インフラが確保されている社会
～エネルギー・コミュニケーション・モビリティなどインフラの確保
- (４) 身体性への回帰
～ＩＴにおぼれず、カラダとアタマを使う社会～
- (５) エイジレスで、高齢者が元気に社会参加する社会
～年齢に関わらず、生きていて楽しい都市生活～
～支えられるだけでなく、社会の役に立つことで充実感を得られる社会～
- (６) 多様性が認められたダイバーシティ社会
～違いに寛容な社会～
- (７) 住みやすい場所住環境・緑と水の整備
～歴史・遺産・人類の資産・パワースポットも充実～
- (８) 働きやすく、ワークスタイルの多様化が実現している社会
～年齢にかかわらず、学校と企業との間を行ったり来たりできるシステムも～
- (９) 学びやすい社会・知的欲求を満たすことができる社会
～特徴ある教育環境の充実、ウイズダム（知恵）を求め続けられる社会～
～国内外の年金生活者が集いたくなるような教育メニュー～
- (１０) 行き過ぎた個人主義の修正／好縁社会／認め合い社会
～地縁・血縁・職縁を越えて同じ嗜好を持った仲間が自然に集まる～
- (１１) ベンチャー精神・新進の気性を養える社会
～年齢の壁をとっばらって自由に交流／学習／互恵できる場としての関西～
- (１２) 自己実現可能性を補助する社会

関西は、ロールモデルとしてこれら要件を備えた「ウエルビーイング社会」を実現する都市圏となることを目指していこう、というのが我々の第１の提言である。

Ⅱ－３．「未来にむけて土壌を整備する」ために我々が自ら取り組もう。

関西として、未来産業を育む土壌を整えるにはどうすればよいだろうか。整備すべき地域としての条件は何なのだろうか。さまざまな優遇策は大事であるが、それらは他の地域が同じ施策を取れば、すぐに模倣されてしまうものである。ヒト、モノ、カネ、情報、風土という条件の中で、まずは、やはり産業にとって大事なものは「ヒト」ではないか。ベンチャー精神を有した「ヒト」が集まり、居住して、互いに刺激しあう場となっていくことで、産業が形成されてゆき、その蓄積が、他に真似のできない芳醇な土壌を形成していくのである。

次に、風土である。シリコンバレーの特徴とされる風土に「OPENNESS」というものがあり、これは首都圏に比して関西が風土・文化として優位性をもてるものなのではないか。

特にアジアの人たちが来訪したくなるための環境を整えることも大事であり、そのためには、アジアの人々から見た場合の不便さをなくすことも必要である。例えば、交通標記を英語にしていこう取り組みなどの中で「英語が通じる関西」を作っていくことも有効な方法であろう。

他地域との差別化をはかる条件整備は、一朝一夕には出来ない。真似の出来ない優位性の確保には、複数の要件をつなぎあせて、時間をかけて蓄積をしていかなければならない。幸いにも、我々には過去の歴史からくる風土・文化がある。目標に向けて取り組む行動力を持ち、固有の文化を大事にし、面白い取り組みを奨励し、新進の気性を有し、自由でオープンな雰囲気を持った経験がある。また、これも幸いなことに、未来はまだ先である。小さな一歩ではあるけれども、これから我々の起こす以下の具体的な行動が、関西の強みをつなぎあわせ、30年先には積み重なって豊かな土壌となっていき、その上に花が咲くことを信じて踏み出していこう、そのための具体的な行動を行おうということが、我々の2つめの提言である。

（１）「ウェルビーイング社会」を目指して行動を起こそう！

我々は「ウェルビーイング社会」というコンセプトを念頭に置き、経済活動、社会活動において、その方向を目指すようにしよう。個人事業主であれば自らの事業として取り組み、経済人としてであれば、ベンチャー企業を支援するなどして、「ウェルビーイング社会」を実現するための産業を未来の関西に体現させていこう。

南フランスにあるソフィア・アンティポリスという地域は産業集積に成功したが、そのスタートは地域出身の政治家ラフィット上院議員の「思い入れ」であった。「関西を、アジアでのウェルビーイング都市圏にしよう」という思い入れでもって、資源投入を行い、居住環境を向上させ、交流を盛んにしていくことで、クオリティ・オブ・ライフを高めていこう。

(2) 東京と同じものを求めず逆をいこう！

2年目の第2回講演会の中で、「東京一極集中が続けば日本経済の衰退は避けられない。例えば英国ではロンドン以外の都市の発展政策が推進されている」との林宜嗣教授による論の紹介があった。地方分権の議論として、あるいは震災をきっかけとして、東京一極集中是正の論が進められているが、関西が東京と同じものを求めようとしてはいけないのではないか。

一年目の議論の中で、関西の地位の低下は1970年の大阪万博以降はじまり、その時期に過度な規制により大阪から企業や大学が逃げ出したことや、「二眼レフ」として東京と同じものを求めてしまったことが原因ではないか、との検討がなされた。東京と同じものを求めてしまったこと、「二眼レフ」の失敗はそこにあったのではないか。同じものを求めてしまうと、二番手でしかなくなる。(そもそも、実際の二眼レフでは、上のレンズがファインダー用、下のレンズが撮影用と機能が異なるのである。)「東京の二番手のポジション」ではなく、関西独自の価値を追求・創造していくべきなのであろう。今や東京一極集中の一つの原因になった「中央官庁による許認可」の位置づけが薄れ、これまでの制約がはずれてきていることは今後の関西にとってはよいことなのであろう。

従って、東京(あるいはソウル、台北、北京、上海、香港、シンガポール)と逆に行く戦略をとり、東京の出来ないことをやるのが肝要となる。まずは、東京にあって関西にないものを関西に備えよ、と考えるのではなく、東京やソウル、台北、北京、上海、香港、シンガポールではできなくて関西にできるものは何か、ということを考えよう。むしろ、東京を意識することはやめよう。東京が集めない人を集め、東京が集めない情報を集積し、東京が提携しない都市とネットワークを築こう。

(3) おもしろいことをやっていこう！

シリコンバレーにしても、スタンフォード大学と各企業が個別に地理的に集積したから発展をしたのではない。そこにいる人たちが、自由に交流をする中から産業が発展してきた。個々の企業がそれぞれに頑張るというのでは、地域としての優位性は蓄積されてこないであろう。

まずは、関西に本社を置く会社の人々が連携して、何かおもしろいことを仕掛けよう。最初は人が交流するだけでもいい。そのような場を作り、何か面白い企画を創り出して、関西というテストベッドで「ウェルビーイング社会」を創り出すきっかけをつくっていこう。それによって、若者にはチャレンジの場を、ベテラン・高齢者には世代継承の場を与えよう。東京では人口が増えすぎて、気骨のある、あるいは異端の人がいたとしてもそれらの人同志がなかなか会うことが叶わなくなっているともいう。関西という規模で、おもしろいことに取り組む同志を増やすべく、オープンな場を設けて連携し、人と人をつなげていこう。

(4) 異端児を育て新進の気性を取り戻そう！

アジアから、あるいは日本の他地域から多様な考え方を持った人が関西に集まるためには、優秀な人が集まる仕組みと、それを支援する仕組みが必要となる。例えば、国連大学の一部機能や国連の一部機能を担う国際機関の設置、あるいは、エンターテインメント系の大学院大学を整備する等の施策により、世界、特にアジアから人が集まる仕組みを考える必要があろう。老若男女を問わずアジアから人が集まり、多様な考え方の人が自由闊達に議論をする中で産業を興す人材は生まれてくるのであろう。あわせてそれらの人材が居着くように、関西が住みたい街として世界でランクインするような、都市間競争に勝てる施策等の実施も必要である。これらにより、「ウェルビーイング社会」の実現を支援する必要があるだろう。

そのような中で、我々ができることは何か。2年目第2回の講演会で、米国シアトルの地域振興策として、「チャンピオン」を育てるという戦略を取っていると教わった。すなわち、企業という見方ではなく、キーパーソンを「チャンピオン」として支援していく、という方法である。我々も、制度面での条件整備を訴える前に、まずは人を集め、人を育てよう。そのときのキーワードとなるのは「異端児」である。

ベンチャー精神にもつながる「異端児」を許容し、地域として育てていかなければならない。そこで、我々経済人が個々人として何ができるのか。これも第2回の鍋山先生の講演の中で、毛利敬親（長州藩主）が後ろ盾となって育てた吉田松陰、また、渋沢栄一が登用した山辺丈夫（東洋紡績初代社長）の例をひいて、両例とも干支が一回り下であることを示された。

我々も、たとえば干支が一回り下で、「これは」という異端児たる人材を探し、自身が後ろ盾となって養成していくことにしよう。一回り下とは限らないし、金銭を伴わない、精神的なサポート、アドバイスでもよい。シリコンバレーでは、「メンター」といわれた人たちが、金銭の授受を目的としてではないサポートをしてきたことがベンチャーを育てたという。

日本ではベンチャーが育たないとの問題意識がある中で、そのブレイクスルーとして、ベンチャー精神を持つ異端児を我々自身の手で育てていけるのではないだろうか。そしてこれは、世代を超えた交流を実現し、世代継承性という我々自身の幸福にもつながる役割を果たすのではないだろうか。「世代継承性」を会社内の後輩以外にも広げ、地域で次世代に自分が獲得したものを伝えていくという仕組みを、まず我々から作っていこう。自分が人生で得た智慧を、インターネットを通じてではなく、直接の聲咳でもって、次世代に伝えていくようにしようではないか。

(5) 明るく元気で楽しいオープンネスの風土を育もう！

アナリ・サクセニアンに「現代の二都物語」という著書がある。アメリカ東海岸のエスタブリッシュであるボストンと西海岸のシリコンバレーを比較し、なぜ、東海岸が没落し、西海岸が立ち直ったか、ということ进行分析した書である。規制に守られたエスタブリッシュの東海岸と、自由奔放と新進の気性の西海岸。これは、東と西というだけの類似性ではなく、首都圏と関西圏になぞらえて考えることもできるだろう。そのためには、自由で闊達な気風を、ふたたび関西が蘇らせなければならない。

関西が特徴を持って「おもしろい」ことを打ち出し、求心力をもって、人を集める。活気を生み出し、「やってみる」ベンチャー精神がみなぎるようにしていく中で、「未来産業」は育まれていくのではないだろうか。肩に力が入りがちな東京に対し、肩の力を抜き、リラックスして、しかし決して不真面目にではなく、すでに文化として育まれている自由でオープンな風土を、さらに伸びやかにしていこうではないか。明るく元気で楽しくしてゆけば、余裕が出来、笑いが生まれる。笑いには『誘引作用』があり、笑いの絶えない所には人を集める力があるという。関西を、明るく元気で楽しい場所にしようと我々一人一人が念じ、行動していくことで、それを風土として醸成していこうではないか。

いうまでもなく、これらは「ウエルビーイング社会」に向けての小さな一歩にすぎない。個人の取り組みだけでは産業を醸成するような土壌の整備には不十分である。特区などの優遇策、人が集まるための魅力ある教育機関や国際的な機関の誘致、象徴的な人材の招致、英語が使える地域への取り組み、各機関や企業などの連携のための仕組みなど、さまざまな取り組みを検討していかなければならない。しかしながら、条件が整えられるのを待っていては、うまくいかない原因を外に求めているのは、いつまでたっても物事は動かない。まずは、われわれが具体的に行動を起こしていくことが、波を起こしていくのである。

3つめの提言として、次に未来に花開かせる産業として5つの領域を示す。

Ⅱ－４．「未来に花開かせる産業」として５つの領域に力を入れよう。

（１）エネルギーを中心とした「グリーン・イノベーション産業」

「ウェルビーイング社会」の基盤として、安定したインフラの提供は不可欠であり、２年目の第一回講演会内容でも、東北の震災により安全で安定した生活基盤の構築がより強いニーズとして現れていることが示された。

社会インフラについて、シナリオでは、「エネルギー」「モビリティ」「コミュニケーション」の３分野について検討したが、関西の優位性と照らし合わせて考えると、「モビリティ」の中心は当面は依然自動車であり、関西には大きな自動車メーカーの集積がないこと、また、「コミュニケーション」は世界基準であり、日本の中では残念ながら東京が中心となっていることなどにも合わせ鑑みると、これらをこれから関西が中心となり、競争力をもって地域として振興させていくことは困難が伴うであろう。一方で、「エネルギー」については、昨年度第１回講演にて、日本政策投資銀行・坂田氏より話をいただいたように、関西には環境・エネルギー関連の蓄積があり、特に「バッテリー」については大きな集積がある。

低炭素・循環型社会への移行・サステナブルという大きな潮流の中で、その社会に向けた産業こそ「未来産業」である、と初年度の第２回講演で京都大学・植田教授が述べられ、「２０５０年までに温室効果ガス排出量を半減するという課題は、文明史的転換とも言うべき課題なのであり、いままで化石燃料が使用できることを前提に作られてきた技術体系や生活様式を根本から変えることになるだろう。その主たる推進力こそ未来産業である」と指摘されているように、グリーン・イノベーションにより見込める産業規模と市場成長性には大きなものがある。まずは、低炭素・循環型社会への移行において中心的な役割を担う「バッテリー」を中心に、「エネルギー」で関西での産業集積を強化していくことが肝心であるとしたい。

既に「関西イノベーション国際戦略総合特区」でも「バッテリー」が重点テーマの一つにあげられている。また、近畿経済産業局では、関西にポテンシャルがあり、低炭素社会において将来の飛躍が期待される「電子・エネルギー技術産業」が世界シェアを獲得し、今後も競争力を維持・強化するために「次世代電子・エネルギー技術産業ナンバーワン戦略プロジェクト」（プロジェクトNEXT）を開始しており、２０１２年度までの３ヶ年を目途に、電子・エネルギー技術産業が世界シェアを維持・獲得し、時に新たな未開拓市場へ進出するため、企業が垣根を越えて連携・協働できるプラットフォームを構築している等の動きもある。

「エネルギーを中心としたグリーン・イノベーション産業」を「ウェルビーイング社会」に向けて関西が力を入れるべき未来産業の１つとして取り上げたい。

(2) 医療（医療機器・医薬）・介護・福祉を中心とした「グローバル・

シルバー・イノベーション産業」

「ウエルビーイング社会」では「高齢者がいきいきと」ということが鍵となる。ヒューマンの基盤である健康・元気があってこそ「ウエルビーイング社会」が成り立つからである。

関西には、医療・バイオに関する集積があり、外科手術ロボット、脳波による意思表示、高齢者補助装置、介護ロボットなどを含むロボットの研究も盛んである。予防も含めた健康・医療分野や、ロボットによる介護・（癒しのロボットなどによる）医療支援分野も合わせてこの分野でも関西が優位性を持てる可能性がある。京大、阪大、理研の先端医療（再生医療や移植等）を核にした医療都市なども考えられ、医療機器も今後広がるマーケットであろう。

既に「関西イノベーション国際戦略総合特区」等でも重点テーマとして、「医薬品」「医療機器」「先端医療技術」「先端医療」があげられているが、「医療（医療機器・医薬）・介護・福祉を中心としたグローバル・シルバー・イノベーション産業」を関西の「未来産業」の一つとしたい。

高齢化の進展に従い、介護・医療産業は産業規模としても大きく、アジアの高齢化（富裕層）に向け、ビジネスとしての展開も期待される。高齢化先進国としての日本の経験を活かし、関西をテストベッドとしてアジアの高齢者市場に展開することが望ましいであろう。

(3) 物語性を活かした「インバウンド観光産業」・「グローバル交流支援産業」

「ウエルビーイング社会」では、多様化・受け入れ・交流が鍵となる。関西の強みとして、我が国有数の観光資源の集積（日本の世界遺産7割、わが国の国宝・重要文化財4割が集積）、関西ならではの文化・おもてなしの心、成長著しいアジアと地理的に近いこと、などがあげられる。

これら観光資産を活かし、上質なおもてなしの心でアジアを中心とした観光客をもてなす「インバウンド観光産業」や「グローバル交流支援産業」も関西の「未来産業」の一つとなりうるであろう。観光産業は世界経済の1割を占め、かつ安定的な成長が見込める産業であるとされる。モノの充足から経験・体験の充足へというトレンドの中で、体験型観光を目指していくこと、さらに観光にとどまらず、アジアを中心とした交流産業を目指したい。その吸引力の一つとして、エンターテインメント産業も関西らしさと相まって役割を果たしていくであろう。

観光資源の活用にあたっては、物語性を活かすべきである。「ローマの休日」効果、「冬のソナタ」効果と言われるように、その歴史に眠る物語性を映画やドラマ（心温まる／せつないラブストーリー）によって光を当て、プロモーションを行おう。ここで、欧米は東京に任せ、我々関西は特化して「アジアにやさしく」という戦略を打ち出そう。東京は世界に向けて全方位外交とならざるを得ない側面を持つ。関西はアジアに特化し、留学・言語・文化交流の交流支援業なども含め、また、企業におけるアジアの人材を研修で招聘するなども行っていこう。一人ひとりが観光資源となるほどにアジアとの交流を深めていくようにしよう。

関西の歴史を物語性の中で呼び起こすことは、実は関西にいる我々自身が、歴史の源流に触れ、原点にもどり、郷土愛と地域としての活気を取り戻すためにも必要なことなのである。

（４） ところをつなぎ認め合う「コミュニティー創成産業」・「絆産業」

「ウェルビーイング社会」は「認めあう心地よいコミュニティー」の存在が鍵となる。マズローのいう第３段階の「所属と愛の欲求」あるいは第４段階の「承認の欲求」、さらには心理学での幸福の条件の一つとされる「親和動機」を満たせるのは、所属するコミュニティー、あるいは人と人の絆である。そのため、「コミュニティー創成産業」・「絆産業」を関西の「未来産業」の一つとしたい。

ただし、このコミュニティー創成、あるいは絆を支えるシステムなどは、産業としての明確な姿や規模／市場・技術としての要素は未知数である。SNSなどに一部の機能が見られ拡大しつつあるものの、具体的な産業としてはまだ姿を現していない。その意味で、まさに「未来産業」であり、その体現に向け、関西企業が先んじて準備を進めていくべきものである。ここで鍵となるのは、「ウェルビーイング社会」の項であげられた「身体性への回帰」ではないだろうか。SNSをはじめとしたバーチャルなネットワークによる人のつながりも、基本となるのは対面で出会ってリアルな場で交流し、相手を確認した人のつながりが主流であるとされる。コミュニティーの創成という社会のニーズが高まる中で、それを支援する形で「コミュニティー創成産業」・「絆産業」が形成されていくのではないだろうか。

その産業の範囲は、認め合い、レコメンデーション、レコグニション、リアルな場の設定支援、資格認定から、自分らしさを体現する葬儀まで、さらには「サロン」産業や、ネットワークを仲介したり「場」を設定するプロデューサー業にまで及ぶであろう。また、社会の中に役割を創りだすことや、個人間での信用補完、といった範囲にまで広がる可能性がある。

ここでの関西の優位性は何なのか。ひとつは「茶の湯」の存在である。応仁の乱により、共同体の壊滅的な解体があったあと、戦国時代にわび茶が台頭した。共同体を再構築しなければならない状況の中で、その基礎になるような人間の身体を作り出さなければならない、と

いう要請が切実にあった。そういう時に有効なのが、気体なり、液体なり、分割不可能なものを分かち合うことであった。杯や煙草を回し飲みする儀礼は、昔から世界各地で見ることができる。そのような状態を作り出すことが、共同体を作り出す鍵なのだろう。それを考えるきっかけを与えたのが茶の湯であったというのが、内田樹氏の説である。茶の湯にはマーケットも存在した。身体性の回復の中で、共同体を再構築する動きを見いだせないか。

もうひとつには、SNSが発達するが、人の関係は学生時代（利害関係がない時代）がベースとなること多く、関西には大学をはじめ全国有数の教育機関の集積があり、優位性の源泉となり得るのではないか、ということである。そのような場を、シリコンバレーのように、インキュベーション的な場に育てていくことができれば、相乗効果がもたらされるであろう。

（５）生涯の学びと世代間継承を支える「教育産業」・「自己実現支援産業」

「ウェルビーイング社会」では「生涯学ぶ／伝承する」ことが鍵となる。そこに、マズローでいう「自己実現の欲求」、心理学でいう「達成動機」のニーズを満たす産業が必要となる。そこで、教育産業・年代層縦断交流支援産業・自己表現サポート産業をはじめとした「**教育産業**」・「**自己実現支援産業**」を関西の「未来産業」の一つとしたい。

これについても、産業としての明確な姿や規模／市場・技術としての要素は未知数であり、その意味での「未来産業」である。具体的な産業としては姿を現しておらず、これも体現に向け、関西企業が先んじて今後準備を進めていくべきものである。関西には全国有数の教育機関の集積と、関西に由来あったとされる「新進の気性」が役に立つかどうかである。

教育は中長期的に関西がとりくむべき分野であろう。日本=東京の input 型の《逆》であり、かつ世界的には一般的な output 型の教育を行っていくべきであろう。「リベラルアーツ」の教育、社会人になるための科学的な教育に力を入れていくべきである。集団重視、内向き、縦割りといった東京型の教育が壁に当たっている中で、その《逆》を行くことが、グローバル標準にもつながっていくと思われる。

第４の産業とした「コミュニティー創成産業」が、主として空間に関係し、「横の連携」を志向するのに対し、第５の産業では、主として世代間の継承など、時間に関係し、「縦の連携」を志向するものといえるであろう。

人間の幸福は、大きく三種類に分けられるという。ひとつめは、パワー動機である。これは、勝ち組になりたい・勝利、金持ちになりたい、人に先んじたい、権力が欲しい、そういう欲求である。ふたつめは、親和動機であり、人と心の繋がりをもちたいというものである。三つ目が、達成動機であり、夢をかなえたいというものである。人は、どれか一つだけ、とい

うことでなく、それぞれのバランスでもってこれらの幸福を追求しているとされる。パワー動機における本能は、「生き残りたい」ということであり、ここでのキーワードは「勝利」である。親和動機における本能は「仲間になりたい」ということであり、ここでのキーワードは「友情」である。達成動機における本能は、高みや道を知りたいという欲求であり、ここでのキーワードは「努力」である。自己実現産業は、この3番目に関わるものである。

また、アイデンティティという言葉そのものの生みの親である心理学者のエリクソンは、『世代性』ということの大事さを説いている。これは次の3つの概念を含む。(1) 創造性：これまでの経験と知識を活かして、何かを生み出す。(2) 世代継承性：自分の会得したものを、次の世代に伝える。(3) 愛他性：人のために何かしてあげようとする優しさ。どれくらい『世代性』を持っているかを測定した心理学の研究では、これらが高い人ほど、自尊感情が高く、幸福感も高いことが分かっているのだという。おそらく、「自己実現支援産業」は、これらに関わることを支援する産業となるのではないだろうか。

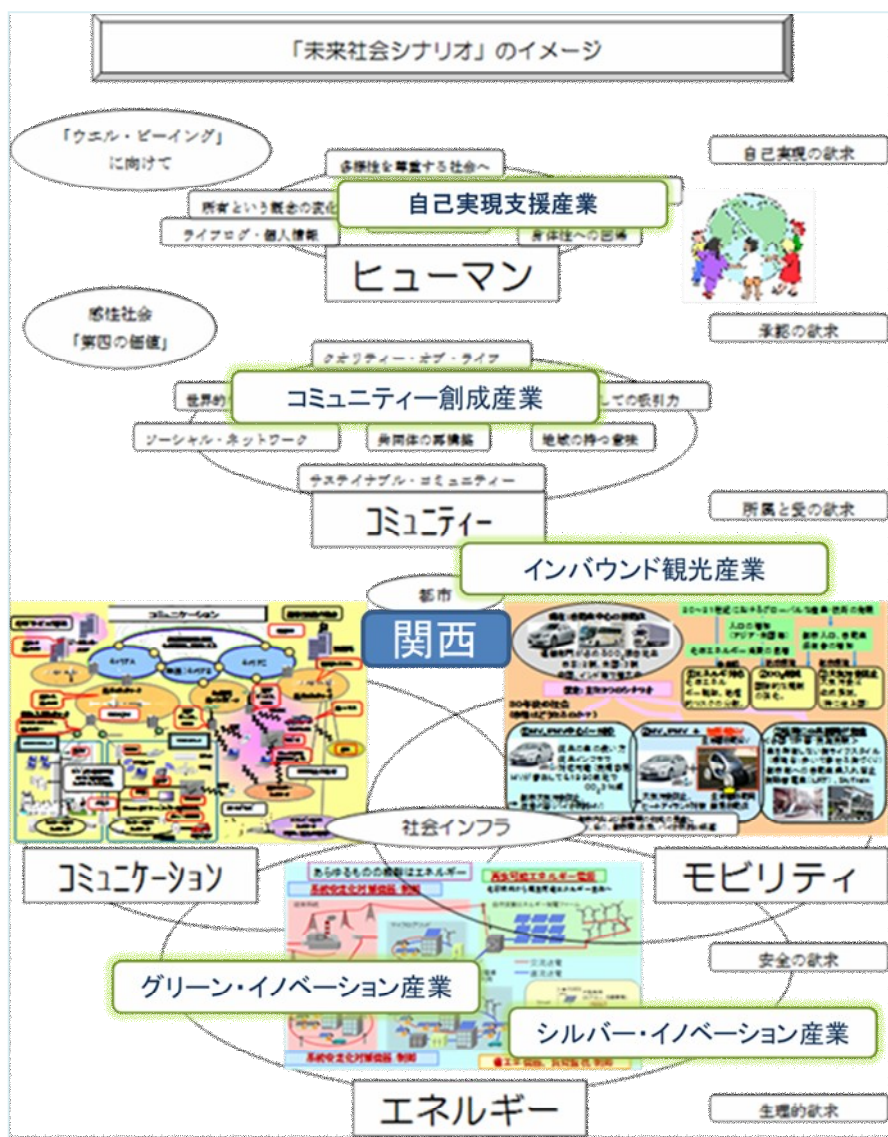


図6 未来社会シナリオと5つの「未来産業」

これら5つの産業に力を入れていき、それが関西に根付いていくことで、安定的な社会インフラが整備され、丈夫な身体を持ち、自らの地域の歴史の物語性を再認識しながらアジアをはじめとする地域の人とも様々な横の交流を持ちつつ、心地よいコミュニティに所属して承認し合い、多様性の中でどのような年齢であっても常に学び、縦の交流である世代継承を行える地域、まさに「ウェルビーイング社会」に関西がなっていく、その魅力が関西に人を引きつけていくであろう。そのために力を入れていくべき産業領域が、ここでとりあげた5つの「未来産業」であるというのが我々の第3の提言である。

ここでは、力を入れるべき産業として5つの領域を選び出したわけであるが、むろん、これらを花開かせるための具体的な取り組みが今後検討されていかなければならない。第1と第2の産業については、特区との関わりが重要になってこよう。第1の産業では、例えばバッテリーを扱う各企業・研究機関等がどう連携していくかということが鍵となろうし、第2の産業では、東大阪の中堅中小企業が保有する技術をどうイノベーションにつなげていくかということなどが鍵になろう。第3の産業については、観光資源を過去のものだけに頼るのではなく、次の世代に残るような、新しい観光資源を創っていくということも肝要であろう。さらに、第4、第5のまだ具現化していない産業群については、たとえば北ヤードのナレッジキャピタルなど新たに産み出されつつある場において、インキュベーション的な場をつくりあげていくことが大切になってくるのではないだろうか。

また、30年先を見据えてこれらに力を入れていくとして、具体的にどこから始めるのか、まずは、5年から10年先の出口を時間軸として見据え、足を踏み出していくためには何をやっていくべきかといった議論が今後必要になってくるであろう。

また、本提言では「関西」をひとくくりとして論じているが、具体論の検討にあたっては、各地域の特徴を考慮しての展開が必要になろう。個性を持つ各都市が、どのような役割分担によって連携をはかりながら未来産業を興していくべきなのか、という視点もまた大事であろうし、それらに向けての連携のしくみを充実させていくことが不可欠であろう。

おわりに

未来産業とその発展モデルの探求という本委員会のテーマは、非常に難しいものであった。そのような中で、委員会では、委員のみならず、スタッフの方々を含めて大変素晴らしいアイデアを出していただき、有意義なディスカッションをすることができたことを感謝申し上げます。委員会におけるディスカッションこそが、本当の成果物であったと感じている。

また、一年目、二年目で計4回の講演会を開催したが、いずれも非常に含蓄のある、学びの多い講演をしていただいた。この場を借りて再度、講師の先生方にお礼を申し上げたい。

未来産業として選ばれた産業のうちのいくつかは、既に関西として力点が置かれているものである。ただし、我々が「未来産業」として選んだ産業群は、「ウエルビーイング」を追求するという意味でも、「人の幸福」に向かう産業なのである。人が幸福を求めてよりよく生きるということが、次世代においてもまだ大切なものである限り、ささやかながら今回の我々の提言は有効なものとなりうるであろう。

ひとつ強調しておきたいことは、我々は単にパラダイムシフトの流れに添った形で、何か儲かる産業を探そうということにはしなかった、ということである。たとえば、未来社会はネット社会で便利になり、身体を動かさず、検索をすれば頭を使わなくなっていくかもしれない。そのトレンドに抗って、「身体性への回帰を目指すことこそがウエルビーイングである」というような主張を行っている。また、関西のあるべき姿として「ウエルビーイング社会」というビジョンを描き、そこに向かって産業とその振興策を単独で考えるのではなく、産業を花開かせるための土壌についてもあわせて考えていく、というフレームワークについては、少しは特徴のあるものとなり得たのではないかと自負している。

本報告書が、あるいは提言を行った我々一人ひとりのこれからの行動が、関西における未来産業を発展させていくための嚆矢となれば嬉しい。委員会に関係された皆様に感謝したい。

平成 22 年度～23 年度 未来産業委員会 活動状況

平成 22 年

- 6 月 17 日 正副委員長会議
「本年度の活動方針（案）」について
- 8 月 3 日 講演会・正副委員長会議
「関西における産業集積の事例としてのバッテリー・クラスター」
講師：株式会社日本政策投資銀行 関西支店 企画調査課 副調査役
坂田 枝実子氏
- 9 月 2 日 正副委員長会議
「未来産業を考えていく上での枠組み」について
- 11 月 26 日 講演会・正副委員長会議
「未来産業と環境経済戦略」
講師：京都大学大学院経済学研究科 教授 植田和弘 氏

平成 23 年

- 3 月 11 日 正副委員長会議
「未来産業検討の基盤となる次世代の社会・生活シナリオ」について
- 4 月 26 日 幹事会にて中間報告
「未来産業を育む『未来社会のシナリオ』を報告
- 6 月 28 日 正副委員長会議
「本年度の活動方針（案）」について
- 9 月 7 日 講演会・正副委員長会議
「L i f e A f t e r 3. 1 1 と生活者の視点から見た未来産業」
講師：博報堂生活総合研究所 所長 嶋本達嗣 氏
- 10 月 19 日 正副委員長会議
「関西における『未来産業』の選定」について

平成 24 年

- 1 月 25 日 講演会・正副委員長会議
「地域における産業集積の条件
～関西で未来産業が花開く土壌を育むために～」
講師：株式会社日本政策投資銀行 産業調査部
チーフエコノミスト 鍋山 徹 氏
- 2 月 16 日 正副委員長会議
「未来産業委員会の提言（案）」について
- 2 月 21 日 常任幹事会・幹事会にて提言（案）を審議・承認
- 3 月 9 日 提言記者発表

平成23年度 未来産業委員会 正副委員長およびスタッフ名簿

平成24年3月9日現在
(敬称略)

委員長	松本 正義	住友電気工業(株)	取締役社長
副委員長	朝田 由治	ユアサM&B(株)	常務取締役
〃	井垣 貴子	(株)健康都市デザイン研究所	取締役社長
〃	浮舟 邦彦	学校法人 滋慶学園	理事長
〃	太田 賢司	シャープ(株)	取締役兼副社長執行役員 東京支社長
〃	岡田 章	D.C.C.	代表
〃	金田 治	日本アイ・ビー・エム(株)	特別顧問
〃	佐藤 潤	(株)昭和丸筒	取締役会長
〃	澤崎 雄介	(株)関西メディカルネット	取締役社長
〃	瀬川 純	ドコモ・エンジニアリング関西(株)	取締役社長
〃	竹中 信之	パナソニック(株)	技監
〃	辰己 重幸	(株)グローバルサイバーグループ	代表取締役
〃	筑紫 勝磨	サントリーホールディングス(株)	顧問
〃	寺岡 龍彦	東神電気(株)	取締役社長
〃	土井 義宏	関西電力(株)	常務取締役
〃	時永 周治	ビューテック(株)	取締役社長
〃	西 亨	(財)大阪科学技術センター	専務理事
〃	西村 淳	日本ヒューレット・パッカード(株)	執行役員西日本支社長
〃	二宮 清	ダイキン工業(株)	囑託
〃	日高 直輝	住友商事(株)	常務執行役員 関西ブロック長
〃	廣瀬 雄二郎	西日本電信電話(株)	取締役
〃	廣野 研一	三菱地所(株)	大阪支店副支店長
〃	細川 信義	エンゼル証券(株)	取締役社長
〃	前田 正尚	(株)日本政策投資銀行	常務執行役員 関西支店長
〃	宮武 健次郎	大日本住友製薬(株)	相談役
〃	山本 香也	SCSK(株)	執行役員 西日本事業本部長
〃	山本 博敏	(株)大林組	常務執行役員

スタッフ	福井 雅	住友電気工業(株)	経営企画部部長
"	平田 嘉裕	住友電気工業(株)	NEXTセンター主幹
"	勝見 修	ユアサM&B(株)	営業本部情報通信担当部長
"	山本 久美子	(株)健康都市デザイン研究所	企画室副室長
"	阿曾 芙実	(株)健康都市デザイン研究所	企画室副室長
"	小野 雅博	シャープ(株)	経営調査室長
"	山元 秀彦	シャープ(株)	経営調査室副参事
"	栗林 次郎	日本アイ・ビー・エム(株)	関西地区部長
"	千 剛	(株)昭和丸筒	事業推進部事業推進室兼国際担当室 アシスタントマネジャー
"	塩見 尚志	(株)関西メディカルネット	総務企画部長
"	松尾 泰昌	ドコモ・エンジニアリング関西(株)	課長
"	飛河 智生	パナソニック(株)	秘書グループ関西財界担当参事
"	平岡 有子	(株)グローバルサイバーグループ	営業統轄本部
"	高谷 和幸	サントリーホールディングス(株)	大阪秘書室部長
"	児玉 智	関西電力(株)	電力流通事業本部 系統運用グループマネジャー
"	藤原 弘道	ビューテック(株)	総務企画部総務部門長
"	駒田 伊知朗	(財)大阪科学技術センター	技術振興部副部長
"	着本 交則	日本ヒューレット・パカード(株)	西日本支社マーケティング担当主任
"	羽賀 文彦	住友商事(株)	関西ブロック総括部業務企画担当部長
"	横沢 啓	三菱地所(株)	大阪支店プロジェクト推進室参事
"	細川 正直	エンゼル証券(株)	公認会計士
"	半田 容章	(株)日本政策投資銀行	関西支店業務部長
"	齊藤 成人	(株)日本政策投資銀行	関西支店企画調査課課長
"	増田 秀穂	SCSK(株)	西日本事業本部管理部長
"	加藤 俊勝	(株)大林組	大阪本店建築事業部企画部部長
代表幹事	西村 昌	西日本電信電話(株)	総務部企画担当部長
スタッフ	笹倉 康伸	西日本電信電話(株)	総務部企画担当課長
"	平尾 誠之	西日本電信電話(株)	総務部企画担当主査
"	絹川 直	(株)大林組	理事 総合企画室大阪企画部長
"	押尾 嘉之	(株)大林組	大阪企画部企画課課長
"	矢島 健	(株)大林組	大阪企画部企画課副課長
事務局	齊藤 行巨	(社)関西経済同友会	常任幹事・事務局長
"	松尾 康弘	(社)関西経済同友会	事務局次長兼企画調査部長
"	野畑 健	(社)関西経済同友会	企画調査部課長
"	小谷 美貴	(社)関西経済同友会	企画調査部主任

平成22年度 未来産業委員会 正副委員長およびスタッフ名簿

平成23年3月11日現在
(敬称略)

委員長	松本 正義	住友電気工業(株)	取締役社長
副委員長	朝田 由治	ユアサM&B(株)	常務取締役
〃	栗村 敏明	(株)ナウプロダクション	代表取締役
〃	井垣 貴子	(株)健康都市デザイン研究所	取締役社長
〃	上松 幸治	(株)島津製作所	常務執行役員関西支社長
〃	太田 賢司	シャープ(株)	東京支社長
〃	岡田 章	D. C. C	代表
〃	門川 清行	(株)竹中工務店	専務執行役員
〃	金田 治	日本アイ・ビー・エム(株)	副会長
〃	桑山 信雄	伊藤忠商事(株)	専務執行役員関西担当役員
〃	佐藤 潤	(株)昭和丸筒	取締役会長
〃	竹中 信之	パナソニック(株)	技監
〃	田中 克彦	LOGISTICS DESIGN	代表
〃	田中 嘉彦	(株)アクセス	専務取締役
〃	寺岡 龍彦	東神電気(株)	取締役社長
〃	土井 義宏	関西電力(株)	常務取締役
〃	時永 周治	ビューテック(株)	取締役社長
〃	富塚 聡	(株)日本政策投資銀行	関西支店業務部長
〃	西 亨	(財)大阪科学技術センター	専務理事
〃	西村 淳	日本ヒューレット・パカード(株)	執行役員西日本支社長
〃	二宮 清	ダイキン工業(株)	嘱託
〃	葉田 順治	エレコム(株)	取締役社長
〃	廣瀬 雄二郎	西日本電信電話(株)	取締役
〃	細川 信義	エンゼル証券(株)	取締役社長
〃	宮武 健次郎	大日本住友製薬(株)	取締役会長
〃	森 修一	住友商事(株)	専務執行役員 関西ブロック長
〃	守安 但	レジャックスホールディングス(株)	取締役社長
〃	山本 香也	(株)CSK	ITソリューション社 執行役員
〃	山本 博敏	(株)大林組	常務執行役員

スタッフ	福井 雅	住友電気工業(株)	経営企画部主幹
"	中神 昌浩	住友電気工業(株)	NEXTセンター兼経理部事業経理グループ主査
"	勝見 修	ユアサM&B(株)	営業本部情報通信担当部長
"	小野 雅博	シャープ(株)	経営調査室長
"	山元 秀彦	シャープ(株)	経営調査室副参事
"	寺田 高久	(株)竹中工務店	プロジェクト開発推進本部 部長
"	栗林 次郎	日本アイ・ビー・エム(株)	関西地区部長
"	的場 佳子	伊藤忠商事(株)	大阪秘書室長
"	千 剛	(株)昭和丸筒	経営管理室国際部アシスタントマネージャー
"	飛河 智生	パナソニック(株)	秘書グループ関西財界担当参事
"	松原 雄樹	関西電力(株)	電力流通事業本部系統運用グループマネジャー
"	藤原 弘道	ビューテック(株)	総務企画部総務部門長
"	尾崎 充孝	(株)日本政策投資銀行	関西支店企画調査課長
"	梅田 信雄	(財)大阪科学技術センター	企画室副室長
"	着本 交則	日本ヒューレット・パカード(株)	製造・流通・サービス営業統括本部 中部・西日本営業本部主任
"	細川 正直	エンゼル証券(株)	公認会計士
"	羽賀 文彦	住友商事(株)	関西ブロック総括部業務企画担当部長
"	藤田 優	レジャックスホールディングス(株)	社長室室長
"	川浪 伸介	(株)CSK	管理部部長
"	潮 恵一郎	(株)大林組	大阪本店秘書室長
代表幹事 スタッフ	福地 俊明	南海電気鉄道(株)	経営政策室部長
	内田 宏	南海電気鉄道(株)	経営政策室課長
	" 西村 昌	西日本電信電話(株)	総務部企画担当部長
	" 笹倉 康伸	西日本電信電話(株)	総務部企画担当課長
	" 平尾 誠之	西日本電信電話(株)	総務部企画担当主査
事務局	斉藤 行巨	(社)関西経済同友会	常任幹事・事務局長
"	松尾 康弘	(社)関西経済同友会	事務局次長兼企画調査部長
"	野畑 健	(社)関西経済同友会	企画調査部課長
"	向井 仁	(社)関西経済同友会	企画調査部